

【5】 考察と今後の課題

本年度は2年次の研究となり、学部構成員のメンバー変更ということから、特にテーマに対する共通理解を大切に、中学部としての研究の方向を確認した。そして発達の段階に視点をあてた生徒の実態把握や、昨年度までの授業実践の見直し等を行った。できるだけ多くの場をとらえて題材を工夫し、あれやこれやと新しい挑戦も試みた一年であった。

生徒一人ひとりのめざす像に題材選定からアプローチしていく方向の評価はまだできていないが、2年間の実践を通して、今後の研究に向けての課題が、少しずつ浮き彫りとなってきた。その課題を以下に示し、今後の実践をより確かなものとして深めていきたい。

1 題材選定の視点をより明確にし、題材を精選する。

校内宿泊学習、野外炊飯、校外学習、修学旅行、大山宿泊学習、学習発表会、お楽しみ会等、これまで繰り返して学習して来た単元を、生徒自身から引き出される題材を選定して新しいテーマの切り口として迫った。生徒にとっての題材の必然性ということを重視した。学習の目的が生徒に明確に理解されなければ、主体的に活動に取り組むことはできない。真にテーマに迫る題材選定の視点を明確にし、より効果的な題材を生徒の思い、教師の指導の意図を大切に精選しながら設定してきた。

2 生徒の発達段階を多面的にとらえ、個に応じた目標を設定し、評価する。

中学部の生徒は、思春期という人格形成の大切な段階に位置しており、表現はうまくできないことが多いが、それなりに自分の思いを持っている。また、この時期、体の成長も著しく、子どもから大人への実質的な第一歩を踏み出す時である。発達段階は個によって異なるが、生活年齢を重視して「中学生らしさ」をどの生徒にも意識させることが大切であると考えられる。したがって生徒の主体的な活動を引き出すためには、その点を十分に踏まえ、一人ひとりをより多面的に、深く理解することが大切である。最後の年となる次年度は、特に自分づくりの観点で一人ひとりの発達をとらえて、目標を設定し、評価を行いたい。また、授業づくりとしての評価も行いたい。

3 教師の適切な支援の仕方、関わり方をつかむ。

生徒の主体的な取り組みを引き出し、支援することを教師の役割としながら、その関わり方がよく理解されていないため、生徒の活動に枠をはめ過ぎていたり、場面場面での適切なアドバイスができず、生徒の気持ちのあたためが十分にできていなかったりした。

教師の待つ・任せる・適切な支援やアドバイス、生徒の思考や行動のペースを大切にすること等、指導者としての意図を明確にした立場のとり方、支援の仕方をより工夫し、寄り添い、よき支援者としての関わり方を具体的に求めていきたい。

4 家庭との連携、家庭への支援

生徒にとって、将来的に支援の基盤となるのは、何といても家庭である。学校での学習取り組みを理解してもらい、家庭でも積み上げていくことは言うまでもなく必要なことであり、今後もこの点については、連携を取り合っていきたい。中学部としては、生徒の生活年齢を重視しており、親離れ、子離れの重要な位置にあることを学校も家庭も自覚し、個に応じた適切な対応、家庭への支援を行って行きたいと考える。